

TEA と質的探究学会

第 2 回大会抄録集



日時：2023年6月10日（土）-11日（日）

場所：6月10日（土）（オンライン；一部対面）

6月11日（日）（対面；一部オンライン）

対面会場：立命館大学大阪いばらきキャンパス

目次・プログラム

| | |
|--|----|
| ご挨拶 | 2 |
| 対面会場へのアクセス..... | 3 |
| オンライン会場へのアクセス..... | 5 |
| 発表者の方へ | 5 |
| 抄録集..... | 6 |
| 1 日目 オンライン；一部対面 | |
| 10：00-12：00 オンラインコメントセッション | 6 |
| 12：30-13：30 オンライン総会 | |
| 14：00-16：00 オンライン大会実行委員会企画シンポジウム..... | 11 |
| 「TEM/TEA におけるトランスビューとナラティブ」 | |
| 16：15-18：00 大会実行委員会企画対面ワークショップ(AS261) ... | 12 |
| 「TEA でつながる一分野間交流ワークショップー」 | |
| 2 日目 対面；一部オンライン | |
| 9：00-10：00 大会記念講演(オンライン/パブリックビュー)(AC230) ... | 13 |
| 「文化的、国際的な質的研究アプローチとしての TEA」 | |
| 10：15-12：15 対面ポスター発表(AS261/AS262) | 14 |
| 13：00-15：00 会員企画対面シンポジウム(AC230) | 26 |
| 研究交流委員会企画対面ワークショップ(AC242)..... | 27 |
| 「hana-TEM アートで描くわたしの径路」 | |
| 15：15-17：15 講習会(AC241/AC242/AC247/AC248) | 28 |

ご挨拶

第2回大会では、「TEA でつながる」を大会テーマとして掲げています。これには、TEA を媒介として多様な分野や背景を持つ人々が連携し、新たな記号が発生する大会にしたい、という願いがこめられています。また、このテーマには第2回大会の使命の一つでもある「言語教育らしさ」も反映されています。TEA への関心は、文化心理学、臨床心理学、社会学、経営学、社会福祉学、介護、看護、保育、教育、言語教育をはじめ、多様な分野に広がっています。第1回大会は保育分野の中坪史典氏が大会実行委員長を務められ、第2回大会は言語教育分野が引き継ぎました。現在、言語教育においては、欧州を中心に提唱されてきた複言語・複文化主義が日本国内の日本語教育にも広がりを見せています。この考え方では、言語教育の目的はテキスト、コミュニケーション、概念などを媒介・仲介する活動（mediating）の促進でもあるとされています。この媒介活動は、異なる言語間だけでなく、同じ言語間においても起きるものです。第2回大会では、TEA を媒介・仲介と捉えることで多様な人、分野、世界観の融合が起き、TEA を用いる人たちにとって今までにない促進的記号が芽生え、新たな可能性を拓く場になればと願っています。

第2回大会の基調講演では、混合方法研究の分野において著名な John W. Creswell 教授をお招きし、「文化的、国際的な質的研究アプローチとしての TEA」についてご講義いただきます。他にも、シンポジウム、ポスター発表、コメントセッション、講習会に加え、会員間で交流しながら学ぶワークショップも2件、用意されていますので、奮ってご参加ください。参加される皆様にとって実り多き場になることを心より願っております。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりましては、多くの方々のご協力とご支援をいただきました。特に、本大会の運営にご尽力くださった委員、スタッフの皆様から心から感謝申し上げます。また、本大会の開催にお力添えいただきました立命館大学総合心理学部の皆様にも深く御礼申し上げます。

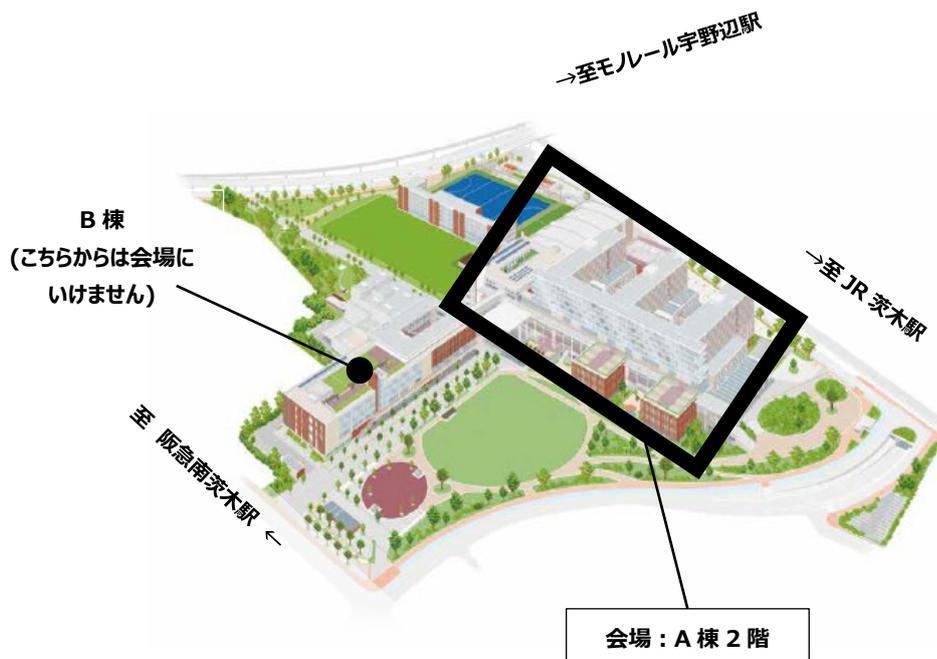
TEAと質的探究学会 第2回大会実行委員長
北出慶子（立命館大学文学部）

対面会場へのアクセス

アクセスマップ：立命館大学大阪いばらきキャンパスへは、JR 茨木駅から徒歩 5 分、阪急／大阪モノレール南茨木駅から徒歩 10 分、大阪モノレール宇野辺駅から徒歩 7 分などです。



キャンパスマップ：会場は、立命館大学大阪いばらきキャンパス A 棟 2F になります（スターバックスが入っている建物とは異なります）。A 棟入り口から入り、2F に上がってください。



会場マップ

1日目と2日目で受付の場所が異なります。

1日目は、A棟から入って2Fに上がり、AS261前に受付がございませう。また2日目は、A棟から入って2Fに上がり、AC230前に受付がございませう。

大会2日目のお昼休憩時間は食事をする場所は限られていますので、お昼はご持参されることをおすすめします。休憩室としてAN227が利用できます。



オンライン会場へのアクセス

大会 1 日目の多くのプログラム、および大会 2 日目の大会記念講演は、Zoom 上で開催予定です（大会記念講演はハイブリッドで開催します）。参加するための URL は、大会ウェブサイトの支払い完了者用のページに掲出します。

大会ウェブサイトの支払い完了者用のページに入るには、ID とパスワードが必要です。これらの ID とパスワードは、大会 3 日前、前日に、Peatix システムからご登録いただいたメールアドレス宛にお送りします。また、大会当日 9 時以降には、Peatix の個人ページからご覧いただけます。

Zoom にログインした際、Zoom 上に表示される名前と所属は、大会参加時に登録したものにしてください。

オンラインコメントセッションは、Zoom のブレイクアウトルームで開催されます。参加者は自由にルーム間を移動できるように設定されていますので、自由にルームを移動して、質疑に参加してください。

大会 1 日目の立命館大学の対面会場からの参加

大会当日、オンラインでの参加用に部屋を一つ用意していますのでご利用ください(WiFi もご用意します)。詳細は、大会受付にご相談下さい。

発表者の方へ

対面ポスターセッションで発表の方へ

ポスター会場の壁面に掲出いただきます。最大サイズは A0 (841 × 1189mm) です。設置用の磁石等は大会の方でご用意します。責任在籍時間は特に指定しませんが、発表時間中はできるだけご自身のポスターが見える位置にしておくようにしてください。

オンラインセッションで発表の方へ、

いずれのセッションも開始の 10 分前には参加できるようにしますので、発表者は、画面共有やカメラ、音声等を事前に確認するようにしてください。

オンラインコメントセッションは、Zoom のブレイクアウトセッションで行います。自分の発表が属するグループ番号のルームで待機し、参加者に対して説明と質疑を行ってください。

発表時間は約 15 分を目処にしてください。

抄録集：オンラインコメントセッション（6月10日10:00-12:00）

Group1 コメンテーター サウタツヤ

OCS1 小学生が訴えた学校での対人被害感を母親が学校に相談し困り感が解消するまで

——TEAを用いた類型化

吉田郁美子（放送大学教養学部）

小学生が対人被害感を訴えた場合に母親が学校へ相談を行い問題が解消するまでのプロセスをTEM 図に表し径路の類型化を行った。径路は足場架け、事件化、特別支援の3類型に分けることができた。足場架けの径路では母親や教師の助言により子どもの自己主張や他者理解が促進され解決していた。事件化の径路では母親と教師の主張の食い違いを含んだやりとりの繰り返しが見られ、最終的には子ども同士の距離を取らせたり謝罪の会を開いたりすることで解決されていたが、子どもは他者を回避するように変容していた。この径路では母親と教師の双方が事案を倫理の問題と考えていたが、倫理観のズレが相互不信を招いたと考えることができた。特別支援の径路では母親は教師へ期待していたケアが得られず、他所に相談をしていた。

OCS2 有機農業実施者の熟達化プロセスに関する研究

中川祥治(放送大学大学院文化科学研究科)

[背景と目的]近年注目されている有機農業の拡大を進める上で、その熟達化プロセスについての知見を得ることは有益と考えられる。しかし、この点に関する先行研究はほぼ皆無であるため、熟達した有機農業実施者を対象として検討した。[方法]全国規模で有機農業実施者約1,200名の会員を擁する団体に所属する熟達者34名から、Glückらが作成し楠見により日本語版化された叡知スクリーニング尺度の高得点者3名を選抜し、半構造化面接を3回ずつ行った。データは質的統合法(KJ法)による切片化とラベル付けを行った後、TLMGを用いないTEAに適用した。[結果と考察]高校卒業から調査時までの期間におけるOPPとして、「家業の継承」、「自然観や人生観の変容」、「消費者の疾病改善の意識」および「後継者の確保」という4つが見出された。これらはそれぞれ、「世襲の優位」、「堅固な意志」、「仕事の喜び」および「身内の好評価」に関連すると思われる。

OCS3 従業員エンゲージメントの ESG 投資プロセスにおける影響

樋口知比呂（立命館大学大学院人間科学研究科）

投資家に向けた人的資本開示の潮流の一環として従業員エンゲージメントへの企業の関心が高まっている。ESG 投資の拡大は年を追うごとに勢いが増してきており、人的資本は社会の一項目として位置づけられる。ESG 投資全体の中で、従業員エンゲージメントは機関投資家・アナリストからみてもどのように評価されているのであろうか。本研究では、このリサーチクエスチョンに対して、ESG 投資プロセスを TEA 理論の TEM を分析手法として用いて明らかにする。機関投資家・アナリスト 4 人を研究協力者として半構造的面接を実施し、ESG 投資をすることを等至点として 4 つの TEM 図と統合 TEM 図を作成し、分析を行った。理論的な貢献は、TEA 理論の分析対象を経営領域に広げて適用したことである。

Group2 コメンテーター 北出慶子・土元哲平

OCS4 介護技能実習生のキャリア形成と日本語学習過程

山元庸子(九州大学大学院地球社会統合科学府)

現在、日本で働く外国人介護労働者の在留資格は多様化している。その中で「技能実習」は日本で獲得した技能・技術を母国に持ち帰るといった趣旨で始まったものの、現在では介護福祉士国家資格取得等の条件を満たすことで日本での永続的就労が可能となっている。その反面、国家資格取得に向けたキャリアを描くために必要な日本語学習については、就労施設と介護技能実習生らが計画しなければならない。そこで本研究では、3 年を超えて日本で働くことを決めた 1 名の介護技能実習生を対象とし、キャリア形成に関わる日本語学習の変容過程と変容要因を明らかにする。このため 4 回の半構造化インタビューを実施し、TEA で分析を行った。また TLMG の枠組みを使用し、キャリア形成が行われる中「日本語能力試験 N2 を重視する」という日本語学習に関する価値観の維持が示された。本研究は、外国人介護士の定着のための日本語学習支援に関して、新たな提案ができると考える。

OCS5 これから求められる高等学校と社会をつなぐコーディネーターの育成過程の検討- Auto-TEM を用いたコーディネーター成長過程の探究-

中山隆(社会構想大学院大学実務教育研究科)

現在、高等学校では、普通科改革を担うコーディネーターの配置が検討されている。しかし、コーディネーターの役割が教員や関係者の理解不足もあり、採用方法が確立されておらず十分な配置につながっていない。また、キャリアを積むことで高度な専門性を持っていくことも期待されるが、育成も手探りでっており、コーディネーターとしての成長は、各人の資質・能力に依存している。

本発表では、コーディネーターの育成方法の手がかりとするため、自身のコーディネーター経験を題材に、成長過程を TEM を用いて分析を行った (Auto-TEM 分析、土元 2022)。分析を通して、自身のコーディネーターとしての成長過程の必須通過点として、所属高等学校の教員及び関係者とのコミュニケーション量確保への意識の高まり、担当業務が単一から複数に増加すること(多能工化)の必要性に気づく、学校経営や教育政策の立案に携わることが確認できた。

OCS6 アメリカ人日本語学習者の日本の離島での経験：英語による TEM 図作成の試み

美濃部大樹 (パデュー大学人文学部)

日本は一万以上の島からなる島国であるが、日本語学習者の日本での経験に関する研究のほとんどは、本土に滞在する日本語学習者に関するものが多く、離島に住む日本語学習者の経験についてはほとんど研究されていない。そこで、本研究は、米国の大学で日本語を専攻し、大学を卒業した現在は日本のとある離島の小学校で英語教師として働いているケヴィン (仮名) のナラティブをもとに、彼のライフストーリーを描くことを目的とする。データはケヴィンの日記と月に一回の半構造化インタビューから収集された。インタビューは計 6 回で、すべて Zoom を用いて行われた。本発表では、ケヴィンが日本の離島に到着してからの最初の 4 カ月に焦点を当て、英語を用いて作成した TEM 図を見せながら、ケヴィンの日本での経験が彼の日本や日本人に対するイメージにどのような影響を与え、また、彼がどのようなアイデンティティを構築したのかを明らかにする。

Group3 コメンテーター 安田裕子

OCS7 第1子の父親の育児準備期から子が生後1才までの育児の体験

千葉朝子（日本赤十字豊田看護大学看護学部）

本研究の目的は、初めて子どもを持つ父親が、妻の妊娠期および子どもとの生活に慣れたと思えるまでの生活の体験を探索することである。初めての子どもを持つ父親6名に半構造化面接を実施した。内容は「妻の妊娠期から赤ちゃんが生まれてからの生活に慣れたと思えた時期やその理由」であった。インタビューは2回実施した。逐語録を質的帰納的に分析し、TEM図を用いて描いた。EFPは「妻と赤ちゃんとの3人の新しい生活に馴染む」とした。3.倫理的配慮：所属機関の研究倫理審査委員会の承認後、研究参加者に文書および口頭で研究依頼を行い、承諾を得た。研究参加者の初回面接調査時の子の月齢は1～10か月であった。全員が共働きで、妻は育児休暇を取得していた。BFPとして、【扱いに慣れない赤ちゃんに抱く緊張感と怖さ】【赤ちゃんの生活のリズムになれるまでに感じたストレスや疲労感】【赤ちゃんがくれる生活への張りややりがい】等が見出された。

OCS8 患者の死の自己決定をめぐる家族と医療者の葛藤や相互理解の変容プロセス

白崎知美(上智大学大学院実践宗教学研究科)

近年、患者中心の医療に注目が集まっている。これは、患者の治療方法を最終的に決めるのは患者自身であるという考え方に基づく医療である。だが現実には、患者の意思決定は家族や医療者や環境からの影響を受けて揺らぐこともあれば、家族と医療者は患者の意思決定をめぐる様々な葛藤を抱えることもある。そこで発表者は、患者が延命治療を拒否したり、無益な治療を差し控えたり、海外の自殺幫助団体で自殺幫助を希望したりする事例の中から、心臓病を患う患者が人工透析治療を拒否した事例に焦点を当て、患者の両親や主治医が抱える葛藤の内実や、三者における相互理解のあり様を明らかにする。この事例では、患者が未成年であったことから、「患者中心」の医療の実現をめぐる関係者の相互理解がより複雑で困難を極めたが、その変容のプロセスを複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて報告する。

OCS9 不眠を有する冠動脈疾患患者が睡眠衛生を導入していくプロセス

平良由香利(沖縄県立看護大学)・神里みどり(沖縄県立看護大学)

本研究は、外来通院中の不眠を有する冠動脈疾患患者が睡眠衛生教育を受け、睡眠衛生の導入プロセスを前向き研究で明らかにした。16名に対し、約6か月間、4回以上の面接と電話による睡眠衛生教育の実施、そのフォローアップを行い、協力者の言動を収集し、TEAを用いて分析した。

プロセスは3つの時期、3つの型に分かれた。第1期は、睡眠衛生教育を受けるまでの「不眠に自分なりに対処する時期」であり、疾患特有の症状が不眠に影響していた。第2期は教育後2～3か月で「睡眠衛生の導入に試行錯誤する時期」であり、I・II型とIII型に分岐した。第3期は教育後4～8か月で「睡眠衛生を生活に取り入れる時期」であり、I型とII型・III型に分岐した。I型の12名は睡眠衛生を導入し、継続することで『EFP：生活の中に睡眠衛生を無理なく取り入れる』に至った。II型は導入の手応えがないために睡眠衛生の継続がなされず、III型は睡眠衛生の導入に至らなかった。

抄録集：オンライン大会実行委員会シンポジウム（6月10日14:00-16:00）

「TEM/TEA におけるトランスビューとナラティブ」

企画者：北出慶子（立命館大学）

上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）

話題提供者：稲田栄一（関西学院大学）

中井好男（大阪大学）

丸田健太郎（広島大学附属小学校）

豊田香（拓殖大学）

指定討論者：横山草介（東京都市大学）

概要：TEM/TEA の特徴の一つとして、TEM 図を介して語り手と聴き手それぞれの視点の融合（トランス）を目指す「トランスビュー」という概念がある。本シンポジウムでは、①TEM/TEA を用いた日本語教育研究および授業実践、②TEM 図を介して語り合う協働自己エスノグラフィ (collaborative autoethnography) の実践、③TEM 図を用いた留学生のキャリア支援の実践、といった3つの観点から TEM 図を介したトランスビューの特徴とその意義について話題提供を行い、議論を深める機会としたい。

抄録集：大会実行委員会企画対面ワークショップ（6月10日16：15-18：00）

（会場：AS261）

「TEA につながる—多分野間交流ワークショップ—」

企画：大会実行委員会（松尾憲暁・上川多恵子・北出慶子・高井かおり・中谷潤子）

概要：TEAの研究や社会実装は、心理学、保育、介護・看護、キャリア、言語教育など、その分野は多岐に渡ります。本企画では、第2回大会テーマ「TEA につながる」ことを目的とし、多様な分野の人々がTEAをきっかけに既存の分野を越えて交流する機会としたいと考えております。ワールドカフェ形式でのワークショップでは、参加者の興味により、「TEAの魅力と難しさ（初学者向け）」「発生の三層モデル（TLMG）の魅力と難しさ」「新しい形のTEM図/TLMG図の挑戦」「研究以外（社会実装）でのTEAの援用」などのテーマで小グループになり、対話型ワークショップを行います。また、ワークショップ後には全体交流会を行い、グループ外の方々とも交流できる場を設ける予定です。TEA/TEM 初学者の方から長年取り組んでおられる方まで、多様な方々のご参加をお待ちしています。

※事前申し込み制

※このワークショップに関する問い合わせは、大会事務局ではなく、下記の大会実行委員会までお願い致します。

問い合わせ先：大会実行委員会 松尾憲暁 matsuo.noriaki.i6@f.gifu-u.ac.jp

抄録集：大会記念講演 (6月11日9:00-10:00)

(会場：AC230&Zoom)

"TEA as a Cultural International Qualitative Research Approach"
「文化的、国際的な質的研究アプローチとしての TEA」

講演者：ジョン・クレスウェル (John W. Creswell) (ミシガン大学)

通訳・解説者：廣瀬真理子 (関西学院大学)

司会者：サトウタツヤ (立命館大学)

This presentation addresses how to expand TEA as an international qualitative research approach. We take the position that discussing TEA as a qualitative approach in Creswell and Poth (2018) book offers a good framework for presenting TEA as an international qualitative approach. To this end, we first discuss the basics of TEA and qualitative research. We then describe the five approaches used in Creswell and Poth's (2018) book and highlight the central topics of the research process. These topics are worldview, research questions, data collection, data analysis, writing structure, bias, validity, and quality criteria. We next apply these topics to TEA. We do this by first mentioning the examples used in the five approaches book, and then present how we would discuss TEA for each topic. The presentation will be followed by a short question and answer session.

本講演では、TEA を国際的な質的研究アプローチとしてどのように展開するかについて取り上げる。Creswell and Poth (2018)の著書『質的研究とリサーチデザイン：5つのアプローチ』でもちいたフレームワークを使って、国際的な研究アプローチとしての TEA について論じる。そこで、まず TEA と質的研究の基本を説明する。次に、Creswell and Poth (2018)の本における5つのアプローチ (訳者注：ナラティブ研究、現象学的研究、エスノメソドロジー、GTA、ケース・スタディ) と、研究プロセスの中心的トピックに焦点をあてる。これらのトピックとは、世界観、リサーチクエスチョン、データ収集、データ分析、そして文章構造、バイアス、妥当性、そしてクオリティ基準である。次に、これらのトピックを TEA に適用する。5つのアプローチの本における例に触れたのち TEA において各トピックを論じる。講演後に短い質疑応答を受け付ける。(適宜日本語解説あり)

抄録集：対面ポスター発表(6月11日10:15-12:15)

(会場：AS261・AS262)

対 P1 子育て女性が再び社会的つながりを求めていく過程

—子持ち主婦からの再挑戦に関する TEA（複線径路等至性アプローチ）—

新屋陽子(立命館大学大学院人間科学研究科)

日本ではかねてからの人口減少に対して、女性の就労を国が挙げて後押しする状況になってから久しいが、社会で活躍するにはキャリアの形成が不可欠である。しかし、女性には結婚、出産、育児等キャリア形成のための就労の継続を容易にさせない要因があると考えられる。

本研究では、多様な要因からキャリア形成の場から一旦退いた女性がその後、新たに社会に出た時、どのような径路をたどり社会との接点を維持していったのかを明らかにする。個々の女性が、それぞれの時代の流れや社会的規範に時にはながされ、また、時には抗いながら再び社会との接点を維持していこうとしている生き方の過程を明らかにする。その過程で生じる家族や社会などに対して生じる様々な感情や本人自身の内なる葛藤などを明らかにし、再活躍することとはどういうことなのかを考えるきっかけを示す。そしてこれから社会に出ていく女性への1つのメッセージになるように努める。

対 P2 臨床看護師の新たな看護観の創生

—うまくいかない看護を経験することによって生じた価値変容—

中本明世(甲南女子大学看護リハビリテーション学部)

本研究は、臨床看護師がもつ看護観がどのようにして変化するのか、その価値変容を明らかにすることを目的とした。経験年数6年目の中堅看護師A氏を対象に、これまでの職務経験についてデータ収集を行った。その職務経験プロセスにおいて、看護観が変化した経験に焦点をあて、発生の三層モデル(TLMG)で分析を行った。A氏は、AYA世代の患者に拒否され関係性が構築できず、これまで通りにはいかないショックを受け、悩み落ち込む経験をしていた。これまでは「患者と積極的に関わるこそ看護だという看護観」をいただいていたが、うまくいかない看護に対する苦悩のなかで、「患者と距離を置くことで成り立つ看護を体感」した。それによって患者との距離感の意味が変わり、『ベッドサイドに行くことだけが看護ではないという新たな看護観の創生』に至った。この看護観の変化によって、A氏は自身の成長を実感し、俯瞰して看護を見れるようになっていた。

対 P3 TEA でみるセカンドキャリアとしての日本語教師の教職経験とピリーフ形成

稲田栄一(関西学院大学国際学部)

日本国内における日本語教師の年齢層は、20～30代に比べ、40代以上、特に50代と60代の日本語教師が圧倒的に多い。また、ボランティアや非常勤の日本語教師の割合が高く、彼らの活躍が教育現場を支える大きな力になっている。その中には、大学や大学院で日本語教育を専攻してからすぐにキャリアを開始した日本語教師だけでなく、企業経験などを経てから、セカンドキャリアとして日本語教育の道に進んだ人材も多く含まれている。こうした人材の教職経験や成長の様相を窺い知ることは、日本語教師の多様性を議論するうえで重要なリソースになると考えられる。そこで、本研究では、家事・育児等を終えてから日本語教師になり、ボランティアや非常勤講師として活躍したA子さんの教職経験をTEAにより可視化する。A子さんのTEM図およびTLMGをもとに、セカンドキャリアとしての日本語教師のやりがいや困難の様相、本人が捉える自己成長のあり方の一例を示す。

対 P4 脳卒中後遺症者の長期的療養生活の変容プロセスとその支援

－「手紙を書く」行為による内省を踏まえて－

横山直子（立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

・安田裕子（立命館大学総合心理学部）

地域脳卒中後遺症者は、周囲との関係性や環境調整が長期的療養生活上、重要な意味を持つ。今回は脳卒中発症後、在宅で療養する対象者の生活内容と周囲との関係性や環境の変遷から、支援内容を検討する目的でTEM分析を行った。対象者は脳出血後約10年経過している在宅療養中の70歳代女性で、中等度の右片麻痺がある。分析の結果、在宅療養初期は、他者との間に日常生活の不自由さによる軋轢があったが、生活の工夫でその不自由さを乗り越えていた。また、目標を持ちつつ行動を起こすたび何らかの障壁にぶつかることを繰り返し、周囲の人々との関係性の調整を図っていたことがTEM図からわかった。更には、「手紙を書く」行為を通じて振り返ることで自らの境遇を内省していた。このことから、対象者の生活上の困難や周囲との関係性を見極め、必要時に対象者の生活の調整を図ったり、内省のサポートを行う事が重要であることが示唆された。

対 P5 ニュージーランドにおいてマオリ語を教えるパケハの葛藤と意味づけ

—複線径路等至性モデリングを用いたライフストーリー研究

岡崎享恭(近畿大学国際学部／大阪公立大学大学院現代システム科学研究科)

本発表の目的は、ニュージーランドでマオリ語を教えるパケハが、どのような葛藤を経験し、どのように自身の役割や活動を意味づけているのか、ライフストーリーインタビューを通して明らかにすることである。パケハとはマオリ語でヨーロッパ系ニュージーランド人を指すが、19 世紀前半より植民主義により英語での教育を強制し、マオリ語を危機言語に追いやってきた。マオリは 1970 年代以降の言語復興運動により、マオリ自身によるマオリの観点からの教育を求め、保育園から大学院までのマオリ語による教育を確立してきた。しかし現在、学校や社会の各所でマオリ語教育が求められ、多数派のパケハもマオリ語を学び、テ・アオ・マオリ（マオリの世界）と関わる機会が増えている。本発表では、大学時代にマオリ語を専攻し、中等教育機関で 5 年のマオリ語教育経験を持つパケハ女性の葛藤と意味づけに焦点を当て、複線径路等至性モデリングを用いて分析を試みる。

対 P6 文化心理学・TEA と関係学の会遇

乾明紀（京都橘大学経済学部／立命館大学大学院人間科学研究科）

一般に関係といえば、二つ以上の個体（対象物）の間に成立する結びつきやかかわりを指すことが多い。しかし、こうした個体の存在（実体）を一次性とし、関係を二次性とする実体論に対し、個体は関係の結節点としての存在であるとする関係論が 20 世紀に登場した。こうした実体論から関係論への転回の中で、「関係学」と称する理論も登場し、社会学領域では、ドイツの社会学者ヴェーゼが、ジンメル形式社会学を発展させながら「関係学」(beziehungslehre) を構築した。また、心理学領域では、松村康平がモレノの心理劇などを発展させ、人間関係の変化・発展を分析する諸技法の体系としての「関係学」(science of relationships) を構想した。ここでは、主に松村の関係学を紹介し、文化心理学・TEA への拡張の可能性と課題について述べる。

対 P7 保育者の子ども理解のプロセス

—TEM と NIRS のジョイント・ディスプレイによるメタ統合より

香曾我部琢(宮城教育大学)・藤田清澄(盛岡大学)・松延毅(社会福祉法人浄勝会認定こども園出雲崎こども園)・駒久美子(千葉大学)・保木井啓史(福島大学)・津田綾子(仙台白百合大学)・郷家史芸(千葉明德短期大学)・中田範子(東京家政学院大学)・石田淳也(常葉大学)・

田宮希砂(青葉学院大学)・高橋恵美(東北生活文化大学短期大学部)

保育者が自らの仕事のやりがい(ワークエンゲージメント)を語る際に、その語りの一つとして「子どもの成長や発達を実感した」経験を取り上げることが多い。つまり、子どもの成長や発達を読み取る資質が、保育者のワークエンゲージメントに影響を与える要因となりえるのである。そこで、本研究では、保育者が遊びの中で子どもをどのように理解しているのか、そのプロセスを、TEM で質的に分析し、NIRS のデータによって前頭前野血流動態の変化を捉え、それらをジョイント・ディスプレイによって子ども理解のプロセスについてメタ統合にしようと考えた。

対 P8 学校間異動による生徒認知の変容と再構築

——高校のホームルーム担任と生徒の関わりに着目して

阪下ちづる(東京大学教育学研究科)

本研究は、高校教師は生徒をどのような視点から捉えているか、またその視点はどのように変容し、再構築されてきたかを明らかにすることを目的とした。分析においては、学校間異動による生徒認知の変容を、ホームルーム担任と生徒の関わりに着目して検討した。分析にあたり、高校教師1名に半構造化インタビューを行い、生徒認知の変容を示す複線径路・等至性モデル(TEM)を作成し、生徒認知の変容が生じたと考えられる出来事について発生の三層モデル(TLMG)を作成した。その結果、以下の2点が示された。(1)学校間の異動は生徒認知の変容と再構築を促進することが示された。教師は異動によって新たな出会いや人間関係を築き、信念としての生徒認知が揺らぐ経験を経て、多様な側面から生徒を捉えるようになっていた。(2)また、学校間の異動という転機において自己と他者を客観的かつ受容的に見る姿勢が、教師の自己の内面の省察へとつながることがわかった。

対 P9 新採 1 年目に患者から暴力を受けた精神科看護師の認識・対処過程

山城直美(一般財団法人佐賀県産業医学協会)・田口友美(佐賀大学医学部看護学科)
・村久保雅孝(佐賀大学医学部看護学科)

本研究は、患者からの暴力体験を持つ新採 1 年目の精神科看護師の認識・対処過程を明らかにし、さらに求められる被暴力支援の内容や時期を導き出すことを目的とする。新採 1 年目に患者からの暴力を体験した精神科看護師 3 名に対し、令和 3 年 4 月からの 12 ヶ月間に 3 回ずつインタビューを行い、複線径路・等至性モデル(TEM)を用いて分析した。2 つの分岐点と 4 つの必須通過点を経て「患者からの暴力を回避できると思える」という等至点に至る TEM 図が再構成され、複線性が明らかとなった。この過程は、暴力を受けた経年看護師の過程と比べ特殊な過程ではなかった。患者から暴力を受けた 1 年目の精神科看護師にとって、プリセプターは心理的距離の近い先輩看護師として特に印象づけられているようであり、被暴力支援の支援者として存在の大きさが示唆された。支援の時期について、特定の時期ということではなく、本人の意欲対応と周囲の適時の支援が求められると考える。

対 P10 「解放」と「リアリティ」：アカデミック・ライティングにおける TEM

市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科)

社会のデジタル化が進む今、自分の魅力がわからないと悩む大学生に出会うことも少なくない。こうした状況では、自己の物語を自由に表現するアプローチが必要になる。本発表では、非心理学専攻の大学生が受講するアカデミック・ライティングにおいて TEM を取り上げる意義について、学生支援・社会展開の 2 つの観点から探る。授業でサトウらの「複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model:TEM)」の説明を行い、経験や社会資源の可視化を文字や文字以外(絵・イラスト、画像、音声や動画)で重層的に試みることで、自己の物語からの解放やリアリティについて大学生と考える。荒木らの「構想マップ」と TEM の違い、TEM 図の危険性、KJ 法と TEM の違いを丁寧に説明することで、音楽や演劇、舞踊などを専攻する大学生に対しても、新たなアカデミック・ライティングの地平を切り開くことができるのである。

対 P11 知的障害のある児童の自己表出を支える教師の関係性支援に関する検討

—小学校知的特別支援学級における一年間の実践の分析を通して—

寺口由岐子（春日部市立牛島小学校）

・吉川和幸（国立特別支援教育総合研究所）

筆者が担任教師をしていた小学校知的障害特別支援学級は、重度の知的障害と ASD が重複した児童、ADHD 傾向のあるグレーゾーンの児童など、在籍児童の実態差が大きい学級であった。交流授業に多く参加する児童もおり、「いつも誰かがいない」学級である。そのような環境であっても、児童らは他者に向けて自己表出を繰り返し、互いのことを理解し合い、一年後には、他者の興味に沿った企画を考え、支援し合える関係に変容した。本研究では、学級全体の変容に影響を及ぼした、児童個々の変容や児童の自己表出を支える担任教師の支援について、TEM 図を作成し、分析することを通して、多様な児童が在籍する学級における関係性支援について検討することを目的とした。分析の結果、教師による継続した SG が、児童が安心して自己表出できる環境をもたらし、児童から児童への SG が生まれる関係性へと変容することが示唆された。

対 P12 特別支援学級における「話し合い活動」で司会児童がアドバンスなエンゲージメント表出に至る変容プロセス

若松美沙（広島大学大学院教育学研究科）

国連によるサママンカ声明を受けて、海外では多様な教育的ニーズのある子ども（児童）の学校でのエンゲージメント（夢中の追求）研究に注目が集まっている。児童のエンゲージメント表出を子細に捉えるため、指示に従うベーシックと複数のアイデアを提案するアドバンスの二層構造が見出され、小学校段階でのアドバンスが必要とされる。自然な教室環境での社会的対話の蓄積が児童のエンゲージメント表出に効果的とされる。社会的対話の 1 つに「話し合い活動」がある。そこで、本研究では、TEA を用いて、10 回分の特別支援学級における「話し合い活動」で司会児童がアドバンスなエンゲージメント表出に至る変容プロセスを分析し、司会経験の意味を理解することを目的とする。結果から、担任依存期、不退転期、目の前の一人の求めに沿う参画促進期、誰一人取り残さない包摂期に区分され、自己の進行不安解消からフォローの発表不安解消に至る変容プロセスが示唆された。

対 P13 震災復興支援におけるボランティア活動の長期継続方法とは

－震災 11 年となった東日本大震災に着目して－

秋口楓(立命館大学大学院人間科学研究科)・サトウツヤ (立命館大学総合心理学部)
日本は災害大国として世界的に認知され、その際に復興支援の一環としてボランティア活動が盛んに行われる。だが、支援活動は極めて短期的である。要因として、支援者側と現地側との支援活動における心理的ギャップから長期継続が困難とされている。本研究では、東日本大震災以降、現在に至るまで何かしらの形で長期的に支援活動に携わっている 3 名の方の人生経路を聞き、TEM を用いて、両者の心理的ギャップを低減させた「支援活動の長期継続方法」について検討した。結果、3 名の TEM の時期区分から共通性があった。各々経路は異なるが、「町のために自分も何かしたい」という確固たる信念に基づいた行動である SPO が存在し、「まちづくり組織」に所属し現在も支援活動を継続していた。そして、支援者側は復興支援のためのボランティアではなく、「まちづくりのためのボランティア」として前提意識を持った上で活動を展開していく重要性が明らかとなった。

対 P14 非法学部所属の学部生による知的財産関係裁判例学習およびプレゼンテーションの実施を通じた教育効果および学生の成長

小田友理恵 (法政大学現代福祉学部)・浦田優子 (法政大学大学院人間社会研究科)・
末宗達行 (金城学院大学生生活環境学部)

本研究は、法学部でない学部の学生が知的財産法関連の裁判例の内容及び意義を学習し、その成果を一般公開のセミナーにおいてプレゼンテーション形式で発表を行う取り組みに参加することを通じて、当該取り組みの教育効果がどのようなものであったか、及びどの程度精神的な成長を遂げたのかを明らかにすることを目的とする。教育効果や精神的な成長の内容及びその要因を明確にするため、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach) に基づき、3 名の学生を対象に計 3 回ずつインタビュー調査を実施し、分析を行う予定である。1 回目のインタビューは、適切な等至点を設定して TEA 図を描くことを目的として、適宜参照可能なインタビューガイドを作成したうえで非構造化面接を実施した。今回の発表では、1 回目のインタビュー内容の分析結果について報告を行う。

対 P15 配慮の必要な保護者への保護者支援—利用者支援専門員インタビューから

上田敏丈（名古屋市立大学大学院人間文化研究科）

保育所に勤務する保育士にとって、乳幼児への保育だけではなく、保護者への子育て支援もまた求められる。一方で、保護者支援に対して保育士が困難感を感じていることがこれまでの知見でまとめられている（勝浦ら 2021）。そこで本研究では、困難感を抱える保育士に対して支援を行う利用者支援専門員から、どのような支援が有効であるか、またその課題を明らかにする。利用者支援専門員は、A 市に在籍する 4 名の専門員である。本調査から、保育士だけの支援が困難なケースがあること、支援に求められる園を超えたネットワークが重要であることが示唆された。

対 P16 ダウン症児を育てる母親の障害受容について

森依子（東九州短期大学）

障害のある子どもの子育ては困難さのある子育てであり、虐待要因のリスクもある。そこで、虐待要因を抑制しているものを知ることが必要と考えた。ダウン症候群の子どもの母親の話を生きた物語として扱い、TEMを作成した。時系列上の社会的助勢になったもの、また社会的抑制になったものを考察し母親 A さんの分岐点または通過点といえる時点を考察した。3 つの事例を得に取り上げた。TLMG で、A さんの事例は A さんがすでに持っている信念、障害概念がベースにあって、家族を追い詰めかねない周囲の発言や言動への対応には、本人のベースの信念や障害概念や教養が対抗の原動力となり、その後の A さんの活動へと続いたと描くことができた。TEA で描く不可逆的な線上から、A さんの学歴、教養を持つものとしての信念、問題解決への情報獲得、行動力。これが、虐待要因への抑制となったのではないかと考える。続けて今後も調査を行ないたい。

対 P17 海外留学志望の娘とそれを反対する母の感情と関係の変容過程：

Auto-TEM による探索的研究

早崎綾(早稲田大学大学院文学研究科)

日本からの海外留学・進学を支援する奨学金やメンター制度は増えている。一方、実際にそのような機会を利用し海外進学できる若者はごく一部であり、特に未成年の場合、親の理解を得ることの難しさが障壁となることが多いようである。しかし、留学に反対する親の信念や、そうした親子関係、その変化過程に関する研究はほとんどない。本研究では、かつて留学に強く反対していた母とその娘である私（研究者）が、どのように関わり合い、関係が変化し、母の説得（私の留学実現）に至ったか、そして留学後の関係はどのようなものか、母親へのインタビューと Auto-TEM（土元, 2020）を用いて可視化することを試みる。これにより、親の説得が困難で留学実現が難しいと感じている学習者を支援するための示唆を得るとともに、複雑な感情的・社会的要因を含む親子関係の変化を TEM で示すという方法論的挑戦をめざす。

対 P18 病院に勤務する理学療法士が地域の介護予防に従事するプロセスで生じた困難感と対処

田口友美(佐賀大学医学部看護学科)・山城直美(一般財団法人佐賀県産業医学協会)

・村久保雅孝(佐賀大学医学部看護学科)

我が国の高齢者対策は喫緊の課題であり、介護予防機能を強化するためにリハ職の関与が打ち出されている。しかし、大半は病院に勤務しながら地域に携わることが容易でないことや、介護予防の実践力が未だ不十分であることが指摘されている。そこで、病院に勤務しながら地域の介護予防に従事している理学療法士が、どのような困難感を抱き対処していくのか、そのプロセスについて検討した。対象者は病院に勤務しながら地域の介護予防に従事している理学療法士 1 名で、3 回のインタビューを行い、複線経路等至性モデルを用いて分析を行った。その結果、病院勤務の経験が地域の介護予防に生かされない葛藤や、病院と地域の両立で起きた困難感に対し、いくつもの対処方法を模索しながらも発展し、今後も病院に勤務しながら地域の介護予防を継続していく方向性を示した。

対 P19 保育者は降園の時間帯の流れをどのように捉えているのか

—A 園保育士 5 名のインタビューから—

渡邊真帆(福山市立大学教育学部)

本研究の目的は、保育施設において子どもが降園する時間帯の流れについて、保育者がどのように捉えているのかを明らかにすることである。保護者の就労形態の多様化に伴い、子どもが保育施設から帰る「降園」のあり方は変化している。集団での生活と個別の降園が同時に進められる時間帯だが、特に延長保育を実施する保育所は、全員降園まで時間帯の幅がある。この複雑な時間帯、保育者が時間の流れをどのように捉えているのか、保育施設 A 園において、延長保育担当経験を有する保育士 5 名にインタビューを行い、複線径路等至性モデリング (TEM) を用いて分析した。その結果、帰りの会頃から全員降園までの流れは、「帰るモードへ」「降園の峠」「1 日の終わりへ」の 3 期に分けられた。「降園の峠」では、SD が多い一方、SG の少なさが目立った。加えて、降園の時間帯の始まりの捉えや「降園の峠」で中心的に語られる内容について、担当による相違が描かれた。

対 P20 特別支援学校教員が定年退職を迎えるまでのプロセス

一度も離職を考えたことのない教員に着目して—

李睿苗(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)・大道香織(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)・加藤望(名古屋学芸大学)・若松美沙(広島大学大学院教育学研究科博士課程後期)・上川多恵子(立命館大学大学院人間科学研究科)・中坪史典(広島大学大学院人間社会科学研究科)

本研究では、一度も離職を考えたことのない特別支援学校教員が、定年退職を迎えるまでのプロセスを明らかにし、教員が働き続けるプロセスにおいてどのように自己意識が変容したかを検討した。データ収集方法はインタビュー調査であり、定年退職後の特別支援学校教員 1 名を研究協力者とした。データ分析方法には Trajectory Equifinality Modeling (複線径路・等至性モデリング) を用いた。その結果、自分の関心に価値を置く黎明期、社会に関心が向いていく過渡期、価値のある税金の使い方ができるかの模索期、価値財によって開かれた特別支援学校教員の始動期、先輩に支えられた発展期、子どもの成長に貢献することに価値を見出す全盛期、人の役に立つことに価値を置く寛解期という 7 つの時期があることを明らかにした。これにより、税金の使い方に関する考えや物事の価値をどこに置くかといった自己意識の変容が、定年退職まで働き続けることの原動力に関与していたことが分かった。

対 P21 教職大学院所属・中堅教諭の授業観察における授業単元の省察プロセス

林直哉（三重大学教職大学院・四日市市立羽津小学校）
・加納岳拓（三重大学教育学部）・岡野昇（三重大学教育学部）

本稿の目的は、授業研究の高度化が求められる教職大学院所属・中堅教諭である授業観察者の省察過程を明らかにすることである。観察者と同様に教職大学院所属・中堅教諭である中学校体育科教師の授業単元（中学校体育科「球技」全 6 時間）において、観察の記録や授業者との対話の記録からエピソードを抽出し、観察者の内省の記録を記述した。方法論として複線径路等至性モデルを採用した。その結果、以下の三点が明らかとなった。(1)観察者はこれまでの実績や経験（既知）を適用させ、「必須通過点」としての授業者との見方・考え方の違いに触れたとしても、授業者の見方・考え方が揺さぶられない限り、既知が繰り返し適用されること、(2)観察者と授業者の両者にとって未知なる状況としての「分岐点」は、適用の繰り返し脱却の足掛かりとなること、(3)観察者の見方・考え方の変容は、子どもの姿を媒介とした授業者と観察者との三項関係に支えられていることである。

対 P22 ひきこもり者の対話的自己の検討 –社会と再接続する分岐点に焦点を当てて–

廣瀬太介(立命館大学人間科学研究科)

2023 年 3 月 31 日に公表された「こども・若者の意識と生活に関する調査」では、ひきこもり者は推定 146 万人いると報告されている。労働人口のうちの 50 人に 1 人が社会的にひきこもっているということは、個人の問題として考えるのではなく、社会・文化の問題が個人に表れていると考える必要があると思われる。そこで、本研究では、20 代男性が社会から離脱してひきこもり生活を送った後に社会に再接続するまでの心理面接の事例を文化心理学に基づく複線径路等至性モデルによって分析した結果を提示する。そして、分析によって抽出された 4 つの分岐点での対話的自己に焦点を当てることで、社会に再接続する時にどのように選択をしたのかを検討する。

対 P23 シンガポール日本語教師会での TEA 講習会：

参加者・講習実施者それぞれの視点から

中田友貴(立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構)

・ウォーカー泉(National University of Singapore, Centre for Language Studies)

・安田裕子(立命館大学総合心理学部)・サトウツツヤ(立命館大学総合心理学部)

TEA を用いた研究は、心理学以外の言語教育学や看護学など他の領域にも広がりを見せている。また、日本のみならず様々な国や地域でも TEA への関心が高まっている。本報告では 2023 年 5 月 5-6 日に実施した TEA 講習会の実施・参加報告を行う。講習会は 2 日にわたって、文化心理学や TEA 理論を対面および Zoom 配信により、そして TEA の実施方法、ワーク、発表・講評と質疑応答を対面により、シンガポール日本語教師の会主催「シンガポール日本語教育国際セミナー」を実施した。質疑応答では、シンガポールでの継承語教育・家庭状況、日本語学校における資格問題について、議論が行われた。また講習会の前後ではフィールドワークを実施し、多民族国家であるシンガポールの歴史・社会・文化・制度に関して知見を得た。講習会の参加者の反応やフィールドワークより、研究の発展可能性が示唆され、シンガポールでの一層の協働の足がかりとなった。

対 P24 「社会的諸力」概念を問い直す：

個人と社会との関係づけを理解するためのいくつかの論点

土元哲平(日本学術振興会・大阪大学大学院人文学研究科)・市川章子(一橋大学大学院言語社会研究科)・小山多三代(立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程)・小田

友理恵(法政大学現代福祉学部)・横山草介(東京都市大学人間科学部)

「社会的諸力」(SD/SG) の概念は、人生径路を描くための実用性という点では、TEM にとって不可欠なものとなりつつある。しかし、この概念は、ヴァルシナーが用いている「社会」や、TEM における「径路」といった語との関連が依然として十分に検討されないまま用いられている。例えば、一般的には「社会的諸力」は、個人のライフコースを変容させるような「外的な力」であると考えられるが、そのような見方は、「個人」と「社会」とを独立したものとしてみなす前提に基づいているとも思われる。一方で、ヴァルシナーの文化心理学においては、「社会」は個人が関わる個人的<>集会的文化において、更一般化された記号論的な領域である。本発表では、SD/SG を TEM の概念として再構築するための論点および、SD/SG 概念の拡張可能性について提案する。

抄録集：会員企画対面シンポジウム（6月11日13：00-15：00）

（会場：AC230）

TEA に個体化・展結を取り入れる試み

—ジルベール・シモンドンの個体化論より—

企画・話題提供：福山未智(立命館大学大学院人間科学研究科)

話題提供：神崎真実(立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構)

話題提供：堀江貴久子(京都産業大学ダイバーシティ推進室)

指定討論：小澤伊久美(国際基督教大学教養学部)

フランスの哲学者ジルベール・シモンドン(Gilbert Simondon)の提唱する「個体化(individuation)」と「展結(transduction)」を複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) に採り入れる為、個体化や展結を用いた研究発表を通じて、TEA の発展の可能性を追求する。著書である『個体化の哲学』においてシモンドンは、個体の実在から個体化を認識するのではなく個体化の操作を第一義とみなし、その発生の原理を記述した。個体化は物理学的、生物学的、心理学的、情報科学的等の様々な水準で行われるものであるが、本企画では3名がそれぞれ異なるフィールドで行った研究を、個体化、展結の理論をTEAに採り入れ分析した結果、またその際に用いた理論について発表を行う。議論を通じて、個体化について理解を深め、また、個体化が質的研究、特にTEAに採り入れた際にどのような有用性があるのか、という点について検討し、更なるTEAの発展に繋げていく。

抄録集：研究交流委員会企画対面ワークショップ（6月11日13：00-15：00）

（会場：AC242）

hana-TEM アートで描くわたしの径路

企画：研究交流委員会（中坪史典・加藤望・上川多恵子・土元哲平・中本明世）

このワークショップは、アートによって人生径路を描くワークを実際に体験しながら参加者同士が交流できる場です。具体的には、花や石などの素材を用いて TEM を作り（hana-TEM と呼びます）、それをもとに他者と交流することになります。人と話すのが苦手、自分自身のことについて言語化するのは苦手、という方でも大丈夫です。ことばにする必要はありません！「さまざまな作品を眺め、感じ、浸る」ことによる共感、ないし他者の感覚と関わることを大切にします。hana-TEM は、TEM の基本的なスキームを活かしながらも、言語にこだわらずに、人生径路における「曖昧さ」や「複雑さ」をより豊かに表現することを目指します。hana-TEM を作成したり、他者と交流することは、自分自身の癒やしになります。また、芸術を通して自己・他者との対話や内省を深める効果も見込まれます。皆様のご参加をお待ちしております。

抄録集：対面講習会（6月11日15:30-17:30）

講習 1：TEA のいろは—TEM の基礎を学ぼう—（会場：AC241）

講師：安田裕子（立命館大学）

複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach：TEA）は、過程と発生をとらえる質的研究の方法論である。TEA は、文化心理学に依拠し、文化的存在である人の発達や人生径路を描出する方法「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）」が、その原点にある。TEM は等至性（Equifinality）の概念を発達の・文化的事象に関する心理学研究に組み込もうと考えたヤーン・ヴァルシナー（2001）の創案にもとづく。等至性の概念では、人間は開放システムととらえられ、歴史的・文化的・社会的な影響を受け多様な軌跡を辿りながらも、ある定常状態に等しく（Equi）到達する（final）存在（安田，2005）とされる。TEM では、研究目的に照らして等至性を具現化する選択や行動を等至点として焦点化し、等至点に至りそこから持続する人間発達や人生径路の多様性・複線性、潜在性・可能性を、非可逆的時間と文化的・社会的な諸力とともにとらえる。本講座では初学者向けのものである。ペアワークを通じて体験的に学ぶ。

引用文献

Valsiner, J., (2001). Comparative study of human cultural development, Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.

安田裕子. (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226

講習 2：TEA（複線径路等至性アプローチ）の理論的進展（2）

（会場：AC242）

講師：サトウツツヤ（立命館大学）

昨年度の大会に引き続き、理論的進展の紹介を行う。TEA（複線径路等至性アプローチ）は、分岐点と等至点とその複線経路が最小のユニットであるが、近隣諸科学の様々な概念を取り入れて発展してきた。たとえば、科学社会学の概念としての必須通過点（OPP）を TEM に取り入れたことがその例としてあげられる。今回は、シモンドンの展結・個体化、松村の関係学と TEA のマリアージュの可能性について焦点をあてていきたい。前者については、時期区分と個体化プロセスのクロスチャート表（福山、2022）を、後者については関係構造の図的表現と TEM や TLMG の接合（乾・サトウ、2023；杉本、2022）を紹介することを通じて、議論を行っていきたい。

講習 3 : 研究方法としてのライフストーリーと TEM 図 (会場 : AC247)

講師 : 高井かおり (東亜大学)

みなさんは「何か」を明らかにするために研究をしていると思います。その何かはどのような方法を用いれば明らかにできるのか、また、どのように示せば読者に伝わり易いのかということも考え研究方法を決めていると思います。私はライフストーリー研究をしていますが、TEM 図の存在を知り初めて描いた時は、単に、ライフストーリーを図にしてみたらおもしろいかもしれないと思ったからでした。しかし、その後、いくつか TEM 図を描くうちに、それぞれが示したいものが違うという当たり前のことに気づきました。そこで、ライフストーリーはどのようなことが示せるのか、一方、TEM 図ではどのようなことが示せるのか、みなさんと一緒に考えたいと思います。そして、実際に 1 つの語りを両方の方法で分析してみたいと思います。

講習 4 : 記号論的文化心理学と TEA における記号 (会場 : AC248)

講師 : 滑田明暢 (静岡大学)

TEA (Trajectory Equifinality Approach: 複線径路等至性アプローチ) は、個々人の経験の径路を描き、その径路において記号がどのように働いているのかを探求することができる理論的方法論的枠組みである。TEA における記号という概念は、記号論的文化心理学の議論に基づいて発展してきた。そのため、記号論的文化心理学の考え方を理解していることが、TEA を用いた研究を進めるうえで役に立つと考えられる。本講習会では、ヴァルシナーによって展開されてきた記号論的文化心理学の考え方 (例えば、Valsiner, 2014 の議論を含む) を概説する。最新の動向というよりは、蓄積されてきた議論の要点をまとめる形での概説をめざす。これまでに展開されてきた記号論的文化心理学についての理解を深めることで、TEA における記号とは何かについての理解を深め、TEA を用いて研究を進めることの後押しをする機会としたい。

TEA と質的探究学会 第 2 回大会実行委員会

大会実行委員長

北出慶子（立命館大学 文学部）

大会実行委員（順不同）

上川多恵子（立命館大学大学院 人間科学研究科）

松尾憲暁（岐阜大学 グローカル推進機構）

高井かおり（東亜大学 芸術学部）

中谷潤子（大阪産業大学 国際学部）

サトウツツヤ（立命館大学 総合心理学部）

安田裕子（立命館大学 総合心理学部）

中田友貴（立命館大学 立命館グローバル・イノベーション機構）

大会事務局

木戸彩恵（関西大学 文学部）

（事務業務代行 LSa）

共催：立命館大学総合心理学部・人間科学研究科

立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）「記号創発システム

科学創成一実世界人工知能と次世代共生社会の学術融合研究拠点」